*産地の研究室から/地域ブランドを育てる(14) *********

リレー随筆

ゆり根

(北海道立花・野菜技術センター研究部 野菜第二科 **小田義信**)

ユリの球根を食べる

'ゆり根'とは、食べることのできるユリの球根をいう。関西方面では、正月料理には欠かすことのできないものである。ユリを食べる習慣は日本のほか、中国の一部にわずかに存在する程度である。

ユリの球根は、葉や茎の変形したもので、植物学的には'鱗茎'といわれる。また、いくつもの鱗片が重なり合って球根を形成していることから、「百合」となったともいわれている。ユリは世界中に100種以上の仲間があるが、その中で食用に向く種類は、苦みが少なく、白色で大球性のものが適す。オニユリ、コオニユリ、ヤマユリなどが食用に向き、テッポウユリ、カノコユリなどは苦みが強く、食用には向かない。北海道で栽培されている種類はコオニユリの系統である。

食べ方としては、あえもの、あんかけ、三杯酢、きんとん、サラダやチップス風にして利用しているほか、乾燥粉末にし、漢方薬としても利用する。

ゆり根栽培の歴史

ユリは昔から山野に自生していたものを食べていたが、江戸時代前期頃から食用としてオニユリが栽培されていた。「農業全書」にも「茎高く、葉の間に黒き子を生じ、五六月紅黄花を開き、花の上に黒胡麻をまきたる如き黒点あり、是巻丹(オニユリ)なり」と



ゆり根の荷姿



花・野菜技術センター庁舎

し、「民家に必ずううべし、民の食を助けて飢餓を救 う」と栽培を奨励している。

明治時代後期の栽培面積は約700 ha と記録されている。生産地は北海道のほか岩手,群馬,埼玉,静岡,京都,岡山など九州を除き全国に及んでいる。戦時中は食料事情や病害虫の被害のため栽培面積は激減した。戦後は京都,奈良,長野の山間地でわずかに栽培が見られる程度であった。昭和50年以降,府県でも栽培の機運があったが,元来冷涼な気候を好む植物であったことから,今ではわずか栽培されているにすぎない。

北海道では、大正初期から空知北部の多度志村(現深川市)などで栽培が始められ、大正末から昭和初めには豊平、琴似(現札幌市)、角田村(現栗山町)などでも栽培されるようになった。昭和10年頃には栽培面積300~400 ha、生産量3,000~3,500 t に達した。

戦時中は「ゆり根はぜいたく品」とされ、また食糧事情の関係で栽培面積が激減した。戦後は周期的に栽培面積の増減を繰り返し、現在約200haの作付けがある。この間、産地は全道的に拡大しながらも、主産地は移動している。輪作圃場の確保の困難性や、ウイルス病の感染による収量減が主要因として考えられる。

生産流涌事情

全国的なゆり根生産の動向は不明だが、平成7年、 北海道での栽培面積は約220 ha、生産量2,300 tとなっている。出荷先は大阪、京都を中心とした関西方面が生産量全体の77%を占めているが、生産者団体や百合根振興会の販路拡大の成果が実り、徐々にではあ るが名古屋, 東京, 仙台などで消費が増えつつある。

バブル経済の崩壊による業務向け需要の減退,若年 層の嗜好の変化などにより,厳しい販売環境におかれ ている。このような中にあって,球根から鱗片を剝が し,真空パック詰めされた,いわゆる'かきゆり'の消 費が伸びている。

産地と試験研究

かつては交配実生による品種の育成に力を傾注し、 一応の成果を上げたが、品種は常に変遷してきた。ゆり根の繁殖は栄養繁殖のため、一度ウイルス病に感染 すると永久的に収量や品質に影響を与えるためで、新 品種育成だけでは抜本的な解決にならなかった。

昭和50年台初め,道立農業試験場では,茎頂培養を利用したフリー球の作出と増殖体系の整備に着手し,一方ではウイルス病汚染の実態とその防除法,ウイルス病感染の診断法の開発などの取り組みを進めてきた。ユリを侵すウイルスは4種類あり,生産地に広く発生しており,アブラムシが媒介することが判明し,種球の生産栽培は寒冷紗被覆による隔離栽培を行う供給体系が確立した。

しかし、現在栽培されている品種は「白銀」1品種で、葉先枯れの多発や鱗茎さび症に弱い、品質が劣るなどの問題を抱えている。生産者からは耐病性を有した高品質の新品種育成を望む声が強くなっている。

今後の課題

北海道のゆり根生産は、全国シェアの90%以上を 占めている。しかし、ゆり根生産においても生産者の 高齢化や後継者不足など、生産状況には厳しいものが ある。種球の入手から販売まで3~5年の年月を要す るため、若手農業者が敬遠する傾向にある。

また、栽培技術が平準化されていないことから起こ



ゆり根隔離網室と栽培圃場

る収量・品質の低下が指摘されている。特に、肥培管理、病害虫防除の技術確立が急がれている。

出荷のピークは12月になるが、この時期に集中すると価格が低迷する。このため事前に出荷、販売計画を策定し、出荷調整を図る必要がある。また、下位等級品を加工向けに回すなど、単価アップを図る取り組みや、2月以降の販売を有利に展開するため、貯蔵法の検討が必要である。

おわりに

当花・野菜技術センターは、平成8年4月1日にオープンした11番目の道立農業試験場である。約62億円を投じて完成した同センターは、試験圃場18 ha、ハウス用地2.5 ha の広さで、道立滝川畜産試験場に隣接している。新品種の開発、栽培技術の改善、生産物の流通・貯蔵などの試験研究のほか、新技術を地域に普及・定着させるため、生産者や指導者の研修事業も行い、総合的にレベルアップを図り、産地間競争に打ち勝てる基盤を確立することが当センターの使命である。

ゆり根では、耐病性、高品質を有した新品種を効率 的に育成する準備を進めている。

. .